

准教授就任のご挨拶

●●● 准教授昇任にあたり—“ひと”の縁の妙— ●●●

琉球大学大学院医学研究科 耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座 准教授 真栄田 裕 行 (7期生)



この度琉球大学大学院医学研究科、耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座准教授に昇任いたしました真栄田裕行と申します。当科は脳と眼を除く広範な頭頸部領域を扱う診療科であるがゆえに、多くの専門領域への細分化が著しい科でもあります。

その中で私は主に頭頸部腫瘍の診療、研究および教育に携わっています。

医学生時代の耳鼻咽喉科ポリクリ実習の際、顔面をノコギリで真っ二つに割るとんでもない手術を偶然見てしまいました。上顎全摘術に衝撃を受けた私は1993年耳鼻咽喉科学教室(野田寛教授当時)に迷わず入局しました。しかしモラトリアム期間の長かった私は大学と関連病院を出戻りながら、何となく仕事(の様なこと)をしているととも出来の悪い研修医でした。そんな折、出向先で自分の進むべき道に初めて光を当てて下さったお二人の先生に出会いました。浦添総合病院耳鼻咽喉科元部長の源河朝博先生(現・げんか耳鼻咽喉科院長)と当時の院長、川西秀徳先生です。お二人とも腐りかけている私に対して温かくも確かな助言をして下さり、また人生の大きな夢を語って下さいました。川西先生から何度も聞いた力強い口癖「人生何事もPassion、Mission、Action!」はそのまま私の座右の銘になっています。その後2002年に静岡赤十字病院に国内留学した私は、いわゆる「神の手」に出会うことになるのです。そこは頭頸部癌治療手術に関し全国屈指の施設であり、統括する行木英生院長は「Best 100 doctors of the World」に選出されるほど手術手技に秀でていました。行木先生から手術の手解きを受ける傍ら、現・琉球大学形成外科学教授の清水雄介先生(当時慶応大学)と仕事をさせて頂く機会を得、現在まで良縁が続いています。その後浦添総合病院時代に懇意にしておりました形成外科の関堂充先生(当時北海道大学、現・筑波大学形成外科学教授)から、北海道大学耳鼻咽喉科の本間明宏先生へ紹介して頂き、2005年北海道大学耳鼻咽喉科へ入局、そのまま大学院生として分子生化学教室(畠山鎮次教授)に入学しました。ここでは「癌の抗癌剤耐性獲得」に関する研究に従事

しました。その時代は人生で精神的に最も厳しい時期となりましたが、医師としてまた研究者としての土台が築かれたと思っています。厳しかった畠山先生ですが今は感謝の念しか生じません。ただし教室に近づくたびに動悸や眩暈が出現するため、その後一歩も近づくことができずしていません。PTSDが発症しているのでしょう。2010年からは音声外科医として世界的に高名な一色信彦先生(元・京都大学形成外科学教授)の下で音声障害の治療に関して学んだ後、帰局を果たしました。琉球大学とは既に縁が切れていたのですが、それを結び直して下さったのが現・耳鼻咽喉科学教授の鈴木幹男先生です。現在の医局はスタッフ間のコミュニケーションが円滑で雰囲気もとても良く、仕事をする環境としては大変素晴らしい体制が整っています。

さて帰局したものの、現在の大学には同期以上の医師は少なく、年月の経過を実感せずにはいられません。同窓同期(7期)では第三内科の古波蔵健太郎先生、山里正演先生、伊敷哲也先生、泌尿器科の呉屋真人先生、宮里実先生、眼科の酒井寛先生、そして麻酔科の中村清哉先生ぐらいしか在籍していませんでした。古波蔵先生にはIgA腎症と病巣感染性扁桃疾患についてのアドバイスを頂き、宮里先生には当科で主催した顔面神経学会での教育講演「泌尿器科領域におけるヘルペスウイルス疾患の治療と今後の展望」を担当して頂きました。また中村先生には毎週多くの手術患者の麻酔の調整をして頂いています。麻酔科の垣花学教授には詰め込み過ぎの手術に対してお叱りを受けることも多いのですが、泊小学校時代からの先輩で、今でも頭が上がりたため黙って言うことを聞くしかありません。また第二外科の國吉幸男教授には学生のころから面倒を見て頂いており、今回の昇任の際にも真先にお祝いして頂きました。他にも恩ある方々は数多くいらっしゃいますが、紙面に限りがありますので替えてお礼を申し上げます。これまで出会った方々は皆、私の人生に大きな影響を及ぼした大事な存在です。時代と共にコミュニケーションの形態が変化した部分もあるでしょうが、やはり“ひと”との直接の繋がりが何にも益して大切なのではないのでしょうか。たくさんの“ひと”との不思議な縁を日々感じながら今後の医療のため精一杯頑張ろうと思っています。どうぞよろしくお願いたします。